

文学という行為と英語教育

土 屋 結 城
伊 澤 高 志

I. はじめに

「わが国における英米語学文学の研究」の促進を主たる目的（「一般財団法人日本英文学会定款」第3条）とする日本英文学会において、英語教育分野への組織的な取り組みがなされるようになったのは21世紀に入ってからである。具体的には、第75回全国大会（2003年）の特別シンポジウム「このままでいいのか日本英文学会」で問題提起されたことに端を発し、第78回全国大会（2006年）で開催された特別シンポジウム「このままでいいのか大学英語教育」において、学会として積極的に英語教育にかかわっていくことが宣言された（斎藤 220）。同年には日本英文学会関東支部に分科会として「英語教育・学習研究会」が発足するなど、その後も全国大会や各支部において様々な試みがなされ、日本英文学会の全体で英語教育についての研究発表・実践報告・シンポジウム等が積極的におこなわれるようになっていく。

日本英文学会における英語教育関連の発表・報告に顕著なのは、英語教育と「文学」とのかかわり、とりわけ英語教育における「文学教材」の用い方を論じるものが多い点である。過去5年間（2009年度から2013年度）の全国大会での研究発表においては、『大会 Proceedings』で概要を確認できるものに限っても、発表タイトルあるいは発表内容に「文学教材」の文言を用いたり、「文学」と「教材」を並置して用いているものが8本ある（「文学教育」を主題とするものは除く）。また、そのうちの多くにおいて「文学」

と「コミュニケーション」という二項対立が前提とされ、その対立を何らかの意味で乗り越えることが目的とされているのも顕著な特徴である。

本論は第一に、この「文学」と「コミュニケーション」という二項対立について、そして—その二項対立が教室での実践において具体化したものとして—「文学教材」と「コミュニケーション能力育成重視の教材」という二項対立について、批判的検討と問題提起をおこなう。これらの先行研究は、英語教育において育成すべき「コミュニケーション能力」の意味を拡張することで、「文学作品」を「教材」として活用し「コミュニケーション能力」の育成に寄与する可能性を主張する傾向にある。しかし、その際に「文学」の意味が十分に再考されることがなく、素朴な文学観に留まったまま「文学」の内在的価値に訴えかける—「文学にはとにかく読むべき価値があるのだ」、あるいは「文学」を「コミュニケーション」という目的に従属させる—「文学だって役に立つのだから認めてくれ」、といったものになってしまっている。

そこで本論は第二に、「文学作品」という「対象」を教材として英語教育に活用するのではなく、文学研究が培ってきた「読み」の実践・方法論を活かすことを試みる。いわば「対象」から「行為」あるいは「動詞」へという、「文学」の拡張である。その立場からの具体的な実践として、コミュニケーション能力育成に主眼をおいたとされる中学校英語教科書 *New Horizon* というテキストの、ポスト・フォーディズム下の労働とコミュニケーションをめぐる矛盾をサブテキストとした「読解」を示す。それによって、教室での「文学教材」の使用とは異なった形で—それを否定することは意図していない—、文学研究のこれまでの蓄積を活かした、文学研究者の英語教育へのかかわりの可能性を示すことを本論の目的とする。

II. 文学とコミュニケーション

まず、しばしば先行研究で示される二項対立について検討したい。先行研究においては、以下のように、英語教育をめぐって「文学」と「コミュ

ニケーション」の対立構造が作られているとの主張がなされ、「コミュニケーション」を重視し「文学」を軽んじる傾向の批判的検討とその対立の乗り越えが目的とされる。

方針²⁾は、文学をコミュニケーションの一形態とみなしてその特徴を考察しようとしたSchmidt (1982) の研究を利用したものである。現在の日本の英語教育に見られる「文学vs.コミュニケーション」という不毛な対立を乗り越える契機となることを期待して取り入れることとした。
(西原,「文学教材」27)

この引用部分では、「文学vs.コミュニケーション」という二項対立の妥当性に疑義が示されているものの、その二者を並置することによって、「文学」が「コミュニケーション」という用語に対応する一つの概念、分野であるとの認識をも示している点を確認しておきたい。

一方、「文学教材」という用語に注目するとこの二項対立は異なる様相を呈する。総じて先行研究においては「文学」と「文学教材」はほぼ同義語として区別されずに使われているが、後者は「教材」であるため教育の言説に組み込まれ、教育の観点からその特質が語られる。その「文学教材」に関しては以下のような二項対立が見られる。

中学の英語教科書 *Total English* (学校図書) の出版方針では、「実践的コミュニケーション能力の基礎を育成する〈擬似コミュニケーション活動〉をLessonごとに用意」と謳われ、... 文学教材はほとんど用いられていない。
(高橋,『大会 Proceedings』44)

この引用では「文学教材」は「擬似コミュニケーション活動」と対立するものと見られているが、「活動」と「教材」が対立項になるのは不均衡である。意図するところは「擬似コミュニケーション活動のための教材」と「文学教材」であろう。

また、以下のような不均衡な対立も見受けられる。

コミュニケーション能力と文学教材を対立関係にあると見なすのではなく、むしろ多くを共有していると認識することで、英語教育への新たな貢献が可能になるのではないだろうか。(久世,『言語情報科学』86)

この引用では、「コミュニケーション能力」と「文学教材」が対立項におかれている。しかし、「能力」と「教材」の対立は不均衡であり、対立すべきは「コミュニケーション能力」と「文学教材によって育成される能力」、あるいは、「コミュニケーション能力育成を目的とする教材」と「文学教材」であるはずだ。

このように「文学教材」という用語をめぐって作り出される対立が不均衡である点に気づけば、これらの主張の背景には図1の構図が隠されていることが見えてくる。

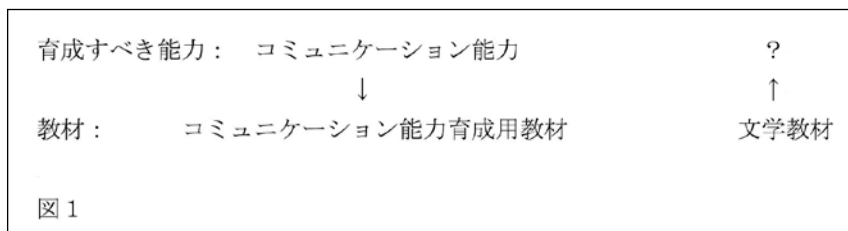


図1の矢印が示しているのは、教材と能力のどちらが先に目的として想定されているかの順序である。先行研究が批判しているコミュニケーション能力育成用教材は、「コミュニケーション能力」の定義が曖昧であるという問題を孕んではいるものの、そのコミュニケーション能力を伸ばすために作成されたという教材の存在理由は明確である。後に詳述するが、中学英語教科書の*New Horizon*では、教科書作成の目的が以下のように示されている。

編集方針

1. 確かな学力がつく教科書

(中略)

- ・聞く・話す・読む・書くの4技能の総合的な育成を図り、
コミュニケーション能力の基礎を養う。

2. 思考力・判断力・表現力がつく教科書

- ・基礎・基本の活用を通して、思考力・判断力・表現力を育む。
- ・言語活動や題材内容の充実を図る。
- ・自ら考え、発信する探究的活動の充実を図る。

(東京書籍,「デジタルパンフレット」4 強調筆者)

このように、育成すべき能力を目的として教材が作成されていることがわかる。

一方の文学教材の場合は、文学作品（の一部）を用いることが先に目的として設定され、いわば教材ありきで、厳密にはどのような能力が育成できるのかは不明である。例えば「文学教材によってこそ育まれるリーディング能力って何だろう?」といった題目の発表が成り立つのがその証左である。² 本論で取り上げている先行研究においても、以下のような表現が見られる。

本発表では、文学作品を用いて、いかに実践的コミュニケーション能力を育成する授業を展開できるかを論じた。 (玉井 38)

本当の意味での『コミュニケーション能力』とは、... 様々な状況の中でテキストや相手と話し合ったり、読み書きし合ったりして解釈を行い、創造的なやりとりを行っていく能力であると考えることができる。コミュニケーション能力をそのように認識した時、そこに文学教材を有効活用できる可能性があるのではないだろうか。

(久世,『言語情報科学』79-80)

間には明確な違いはなく、ただ読者の処理の仕方（または読み方）が異なるだけであると考えられて」いるからであり（西原, *Language* 268）、精緻な議論を進めようとすればするほど、以下のような循環論法に陥ってしまう。

チェックリスト³に含まれる文学的言語表現は文学作品だけでしか見られないというわけではない。Carter (1999) が述べているように、このような表現は日常会話などその他のジャンルでも使用される。ただし、それらが最も典型的に使用されるのは文学作品においてである。

（西原, *Language* 252）

この循環論法の陥穽に加えて、以下の引用も逆説的に文学教材の特徴について語ることの困難さを露呈してしまっている。

文学教材は、豊かな文脈の中で英語を教えられるという利点を持つばかりでなく、さまざまなジャンルのテキストを取り込む可能性を有し、一定の解釈を要する部分と幅広い解釈を可能にする部分を併せ持つなど、多様な活動を可能にする素材である。

（高橋, 『大会 Proceedings』 45 強調筆者）

これ⁴は、文体的特徴（テキスト）から、その作品のテーマや作家の意図、さらにそれが書かれた時代・社会の背景（コンテキスト）までを推測する読みの実践である「教育的文体論」の趣旨にも通ずる。このテキストの「広がり」は文学作品特有のものであり、英語教育における文学教材の有効性を測るには重要な要素である。（寺西 34 強調筆者）

資格試験の題材に、解釈の多様性を持つ文学作品は不向きなので使われない。（齋藤 安 33 強調筆者）

以上の記述に見られる「文学教材」の特徴として顕著なものとしては、解釈の多様性があること、時代背景・社会・作者あるいは他のテキストなどと相互に関連しつつテキストからコンテキストへとという広がりがある点があげられる。これらはあたかも「文学」が内在的にもつ特質であるかのように論じられているが、文学理論の歴史に鑑みれば、「文学」テキストにこのような特質を見出すこと自体、特定の批評的立場からのものであり、いわば読者の解釈・受容という行為に依存する性質のものである。テリー・イーグルトン (Terry Eagleton) は『文学とは何か』(*Literary Theory*)において、「文学とは、人間の文字表現 (ライティング) との関り方、その関り方の総体」と定義し、したがって文学は「昆虫が存在しているように客観的に存在するのではないのもちろんのこと、文学を構成している価値判断は歴史的变化を受けるものである」とした (イーグルトン 14)。またロバート・イーグルストン (Robert Eagleston) は、その著作『「英文学」とは何か — 新しい知の構築のために』の原著名 *Doing English* という表現にも表れているとおり、「文学は、一つの名詞あるいは物というよりは、動詞、「行なうこと」なのである」(イーグルストン 80) と定義づけた。したがって、行為遂行的に文学が形成される可能性は否定しがたく、ゆえに上で引用した文学教材の特徴を文学教材特有のものであると結論づけることはできない。本章で検討してきた先行研究が日本英文学会場でなされた発表であることを踏まえるならば、「コミュニケーション」という用語の意味の議論だけでなく、文学理論の教科書的なこれらの著作で示されたような、文学の定義をめぐる議論を踏まえ、教育の言説とは異なる方法論から「文学」の意味を問い直し、拡張させるような議論を展開する可能性を考えてみても良いのではないだろうか。

III. ポスト・フォーダイズム下のコミュニケーション

「はじめに」で述べたとおり、本論はこれまでの文学教材についての研究の成果を否定するものではない。「文学」を定義づけ、「文学教材」の効用を定義づけることの（不）可能性について議論することは今後も必要であろう。しかし本論では、文学研究の蓄積を活かしつつ、文学を動詞、行為として捉える観点から現行の英語教育の言説を精読、批判する可能性を模索したい。

その可能性を探るための具体的実践例として、中学生向けの検定教科書 *New Horizon* のテキストを検討する。先行研究では *Total English* がコミュニケーション能力育成用の教材の代表例として名があがっていたが、*Total English* は、2012年度の改訂により内容が変わったためか、そのコミュニケーション能力育成の方針は変わらないものの、出版方針から「擬似コミュニケーション活動」の文言が消えている。また中学校でのシェアは11.8%と検定教科書を発行している6社中4位となっている。一方、同様にコミュニケーション能力育成を目標に掲げている *New Horizon* は中学校でのシェア33.2%で6社中トップであり、代表例とするにふさわしいと判断し、本論で取り上げることにする（渡辺 6）。

2012年4月から使用されている *New Horizon* は、語彙や文法など英語の基礎、基本を学ぶことを目的とするUnitと、コミュニケーション活動中心のPlusと呼ばれるアクティビティから成り、その合間にLet's Readと題された読み物や、文法の復習などが挿入される構成である。本論では特に中学2年生向けの *English Course 2* の“Unit 1 Dogs with Jobs”に注目したい。主要登場人物4人が通う緑中学校で盲導犬体験教室が開かれるという設定で、盲導犬のPR犬であるジェニー（Jenny）が来校することを英語担当教員のブラウン先生（Ms. Brown）が説明する場面からUnitが始まる。

Ms. Brown: Jenny was a guide dog two years ago. She helped her user a lot.
 They were very good friends. Now she's a PR dog. She's proud
 of her new job. (笠島 4)

そして、体験教室後、4人が抱いた感想が以下のように示される。

Sakura: Jenny was cute! She looked happy with the instructor.
 Can we meet her again?
 Ichiro: I was very surprised. Jenny sat beside the instructor and never barked.
 Kevin: Jenny was waiting quietly during the instructor's speech.
 She looked very smart.
 Becky: We can be like Jenny. She's very helpful. Let's help people, too.
 (笠島 7)

このUnitで注目したいのが盲導犬のジェニーに会ったあとのベッキー(Becky)の発言である。彼女は感想として“*We can be like Jenny*”と述べている。この“*we*”が、4人の生徒たちのみを指すものか、読者まで含んでいると考えるべきかは判断しづらいが、いずれにせよ、ここで彼女は犬であるジェニーと同一化することをほかの3人、ないし読者である中学生に求めていることになる。ベッキーの発言の意図はもちろん“*Let's help people, too*”にあり、ジェニーのように人を助けるべきだというのが趣旨である。その趣旨に則ると、ベッキーは盲導犬への理解を深め、助け合いの精神を学び、ジェニーの“*helpful*”な一面に注目して感銘を受けていると考えられる。

しかし、ベッキーの発言に至るまでにほかの3人があげたジェニーの性質を見ると、この“*We can be like Jenny*”は異なる意味を帯びてくる。ほかの3人は、ジェニーがインストラクターと一緒にいると幸せそうにしており、そのそばで決して吠えず、静かにしているさまに心を動かされている。ベッキーの言う“*We can be like Jenny*”には、これらの性質が通奏低音として響く。

付け加えるならば、このUnitに登場する、人を助ける存在はジェニーだけではない。盲導犬のインストラクターも人を助ける仕事をしており、中学生が同一化する対象としては、インストラクターの方が盲導犬よりも現実的である。しかし、ここではそのインストラクターとの同一化は求められていない。ベッキーが同一化する対象に選んでいるのは、あくまでもインストラクターのそばで吠えず、静かにし、かつ、それを幸せだと思ふような存在であるジェニーである。そして、ジェニーが実際にどのようなことをしたのかがUnitの中で示されない点に鑑みると、このUnit内においてジェニーはPR犬であるにもかかわらず、コミュニケーションすることを抑圧されているのである。

コミュニケーションを推奨するはずの教材において、コミュニケーションが抑圧されているものとの同一化が呼びかけられているのは明らかな矛盾である。この矛盾を考察する上で参照したい概念がポスト・フォーディズムである。フォーディズムのシステムでは、コミュニケーションは生産活動を阻害するものとみなされていたが、ポスト・フォーディズムのシステムでは、生産ラインにコミュニケーションを組み込み、「リズムや職務の変化に高度な適応能力を有するタイプの労働力、情報の流れを『読み』、『コミュニケーションしながら働く』ことのできる多機能な労働力」が理想とされ（マラツツイ 18 強調原著者）、労働者には「コミュニケーション能力に加えて、フレキシビリティ（柔軟性）、自己マネジメント能力、自律性」が求められるとされるが（大貫、河野 319）、これらの能力はまさに*New Horizon*が謳うところの「基礎・基本の活用を通して、思考力・判断力・表現力を育む」、「自ら考え、発信する探究的活動の充実を図る」という目的と合致する。

しかしポスト・フォーディズムの議論では、それとは矛盾する「隷従的關係の復活」が指摘されてもいる。

新しい労働方式では、企業の目標に対する固い忠誠心が必要とされる。有期雇用契約で働くことのできる特権に浴した者は、企業内の「体質」

の変化や需要の変動に左右される生産の変化に自由自在に対応できることを示さなければならない。...労働者は、職場を失うリスクを避けようと齟齬しながら、従順かつ忠実に要求に応じることができるとを示さなければならない。(マラッツィ 43)

What modern management techniques are looking for is for ‘the worker’s soul to become part of the factory.’ The worker’s personality and subjectivity have to be made susceptible to organization and command. (Lazzarato 134)

これらの引用にある「従順かつ忠実に要求に応じる」労働者の姿、あるいは“susceptible to organization and command”な労働者の姿は、“sat beside the instructor and never barked”、“waiting quietly during the instructor’s speech”と描写されるジェニーの姿と重なる。そして、“the worker’s soul to become part of the factory”という状態が求められる労働者の姿は、ブラウン先生が述べているようにジェニーが“proud of her new job”である様子や、生徒の一人さくら(Sakura)が“she looked happy”と述べているさまと重なる。より正確を期すと、周囲の者がそのような労働者の姿をジェニーに投影しそれを称賛しているのである。このように解釈すると、ベッキーの言葉からはこのテキストが次のようなことを求めていると考えることができる。すなわち、自分に指示を与える者のそばで吠えず、人の助けとなり、自らの仕事に誇りを持ち、幸せを感じるような労働者の姿を内面化することである。

コミュニケーション能力向上を目的としているようで実はコミュニケーションが抑圧されているという矛盾は、先のマラッツィやラッツァラート(Lazzarato)の引用にもあったように、ポスト・フォーディズムに内在する矛盾の一つの発露であり、またポスト・フォーディズムの由来ともなった、トヨタの生産現場で顕在化していると指摘された矛盾でもある。トヨタの生産現場では、「視える化」が徹底されているために労働者が相互監視の下に置かれ、そのため、以下のような現象が起きていると指摘されている。

トヨタは『ものづくり』を標榜してきたが、作りこむ対象は‘もの’だけにとどまらない。工場内外の全空間を作り込み、最終的には、人間そのものを作り込んでいる。労働者が身につけているモノとして強調すべきは、ポスト・フォーディズム論で主張された熟練ではなく、規律である。(伊原 80)

労働者の自律性が求められるポスト・フォーディズムの由来となったトヨタの生産現場で、実際には管理、規律が充満しているという矛盾が、「コミュニケーション能力の基礎を養う」と謳いながら、インストラクターのそばで沈黙する存在との同一化を求めるテキストと重なるのである。

IV. 結論

このように、コミュニケーション能力育成用教材とみなされている教材を精読することにより、現在の英語教育に対して、今までとは異なった取り組みをすることが可能になる。この教材の読解に基づけば、現在の英語教育の場では、コミュニケーション能力を育成すると謳いながらその実コミュニケーションを抑圧しているのではないか、という批判を展開することも、あるいは、ポスト・フォーディズムのシステムにコミュニケーションを推奨しつつも抑圧する力が内在しているのであれば、そもそもポスト・フォーディズム下の現在の日本でコミュニケーション能力育成を教育の目的に据えることが可能／妥当なのかという批判を展開することも可能となる。日本英文学会が英語教育とかわるのであれば、文学教材の効果、重要性についての議論とともに、文学ありきの従来の議論ともコミュニケーションありきの教育の議論とも異なる形での生産的な議論のありようを模索しても良いのではないだろうか。

註

本稿は2013年6月22日、日本英文学会関東支部夏季大会（於明治大学）において行った口頭発表の原稿に加筆・修正を施したものである。

- 1 英語文学テスト作成のために著者があげた5つの方針の2番目。「文学コミュニケーション」という考え方を導入することを説いている。
- 2 2012年10月28日に開催された日本英文学会中国四国支部大会シンポジウム「英語リーディング教授法の多様化のなかで—文学研究者に存在意味はあるのか」における小野章の発表題目。この発表を基にした論文「文学を通して育成される英語リーディング力とは—新高等学校学習指導要領とコミュニケーション能力論を踏まえて—」を参照すると、この発表では、『はじめに文学ありき』を主張し、文学を英語教育に取り入れることを前提とするものでは決してない」と断りが述べられ、H.D.Brownの論を参照しつつリーディング能力の分析を行っているものの、「文学との相性が比較的良好な読解下位能力は果たして何であろうか」という疑問を提起している点において、文学ありきの発想であったことが示唆されている点は否めない（小野 147-8）。リーディング能力を育成するための教材ならばリーディング教材という呼称がすでに一般に流布しており、文学教材という呼び名を用いる十分な理由には成り得ない。
- 3 文体論の成果に基づき、「英語文学作品で頻繁に使用され、かつテキスト内で重要な働きをすることが多い」言語表現をチェックするために筆者が提案したリスト。
- 4 「NHKテレビ3か月トピック英会話」において、文学作品に登場する日常会話表現が作品のテーマや意図と密接にかかわっている点が解説されたことを指す。

Works Cited

- Eaglestone, Robert. *Doing English: A Guide for Literature Students*. 3rd ed. London and New York: Routledge, 2009. Print. [ロバート・イーグルストン『「英文学」とは何か—新しい知の構築のために』川口喬一訳. 東京: 研究社, 2003. Print.]
- Lazzarato, Maurizio. "Immaterial Labor." Trans. Paul Colilli and Ed Emory. *Radical Thoughts in Italy: A Potential Politics*. Ed. Paulo Virno and Michael Hardt. Minneapolis: U of Minnesota, 1996. 133-47. Print.
- イーグルトン, テリー『新版 文学とは何か—現代批評理論への招待』大橋洋一訳. 東京: 岩波書店, 1997. Print.
- 「一般財団法人日本英文学会定款」『日本英文学会』日本英文学会, 22 Feb. 2008. Web. 24 Nov. 2014.
- 伊原亮司「トヨタの労働現場の変容と現場管理の本質 ポスト・フォーディズム論から『格差社会』論を経て」『現代思想』38 (2007): 70-87. Print.
- 大貫隆史, 河野真太郎「コミュニケーション」大貫隆史, 河野真太郎, 川端康雄編著『文化と社会を読む批評キーワード辞典』東京: 研究社, 2013. 312-20. Print.
- 小野章「文学を通して育成される英語リーディング力とは—新高等学校学習指導要領とコミュニケーション能力論を踏まえて—」『広島外国語研究』16 (2013): 147-58. Print.
- 笠島準一, 関典明他36名 *New Horizon: English Course 2*. 東京: 東京書籍, 2012. Print.
- 久世恭子「コミュニケーション能力育成と文学教材 その対立関係を越えて」『第83回大会Proceedings』21-22 May 2011, 北九州市立大学. 東京: 日本英文学会, 2011. 28-30. Print.
- 「コミュニケーション能力育成についての一考察—文学教材を用いた英語授業から—」『言語情報科学』10 (2012): 73-89. Print.
- 齋藤安以子「言語学習教材としての文学の回帰 文体論が果たす役割」『第84回大会Proceedings』26-27 May 2012, 専修大学. 東京: 日本英文学会, 2012. 33-4. Print.
- 斎藤兆史「学会は研究・教育のために何ができるか?—英語教育部門」『第83回大会Proceedings』21-22 May 2011, 北九州市立大学. 東京: 日本英文学会, 2011. 220. Print.
- 高橋和子「文学教材を授業で活かす試み 1980年代以降の英語教育が置かれている状況を背景に」『第81回大会Proceedings』30-31 May 2009, 東京大学. 東京: 日本英文学会, 2009. 44-6. Print.
- 「短編小説を用いた大学英語の授業—Katherine Mansfieldを中心に」『言語情報科学』8 (2010): 101-17. Print.
- 玉井史絵「文学の教材としての可能性 実践的コミュニケーション能力育成のため

- に」『第82回大会Proceedings』 29-30 May 2010, 神戸大学. 東京：日本英文学会, 2010. 38-40. Print.
- 寺西雅之「『モダニスト・フィクション』を教える」『第83回大会Proceedings』 21-22 May 2011, 北九州市立大学. 東京：日本英文学会, 2011. 34-6. Print.
- 東京書籍「デジタルパンフレット」『平成24年度版中学校教科書のご紹介 *New Horizon*』東京書籍, 2011. Web. 21 Feb. 2013.
- 「教室の窓—新教科書特集—」『平成24年度版中学校教科書のご紹介 *New Horizon*』東京書籍, 2011. Web. 15 Jun. 2013.
- 西原貴之「Hare-in-the-Moonから英語教育への贈り物? 教材「The Hare's Gift」における文学的言語表現とそれらの設問での扱われ方についての検討」『第82回大会Proceedings』 29-30 May 2010, 神戸大学. 東京：日本英文学会, 2010. 41-3. Print.
- 「Hare-in-the-Moonから英語教育への贈り物? — 教材“*The Hare's Gift*”における文学的言語表現とそれらの付属教材での扱われ方についての検討—」 *Language Education & Technology* 49 (2012) : 245-74. Print.
- 「文学教材を使用した一般英語リーディング授業の期末テストに関する一考察」『第85回大会Proceedings』 25-26 May 2013, 東北大学. 東京：日本英文学会, 2013. 27-8. Print.
- マラッツィ, クリステイアン『現代経済の大転換—コミュニケーションが仕事になるとき』多賀健太郎訳. 東京：青土社, 2009. Print.
- 渡辺敦司「前年度比4.0%増の3676万冊に：2012年度中学校教科書採択状況—文科省まとめ」『内外教育』 6125 (2011) : 6-8. Print.